

旅

旭川市医師会
JA北海道厚生連旭川厚生病院

さとう けいすけ
佐藤 啓介

1989年旭川医大を卒業した。この年、日本ではバブル景気の最盛期であったが、世界では、3月「ソビエト共産党が選挙で敗北」、6月「ポーランドの自由選挙で『連帯』の圧勝」、6月「北京の天安門事件」、11月「ベルリンの壁崩壊」、12月「ルーマニア革命」など社会主義国家で大変革が起こった。33年後の現在、ロシアのウクライナ侵攻の報道を無念に感じながらこの文章を書いている。

国家試験終了後の4月16日、成田空港で待ち合わせ、友人とヨーロッパへと向かった。航空会社はアエロフロート（ソ連国営）、最も安いヨーロッパ便を選んだ。飛行機は古い機種だったが、エコノミーの機内食にもかかわらず、キャビアが添えられたおいしい夕食であった。モスクワのシェレメチェボ空港を経由してロンドンのヒースロー空港に到着し、ロンドン市内のホテルに23時にチェックインした。17日、早朝からロンドン塔、セント・ジェームス・パーク、バッキンガム宮殿や国立博物館などを巡り、夕方にはイングランド西部の都市バースに移動した。18日、ローマン・バス、ロイヤル・クレセントなど古きローマ時代や18世紀ジョージ王朝時代の建築物の壮大さに感動した。その後ドーバーに移動し、フェリーでベルギーのオーステンデを経て、19日早朝、ブリュッセルに到着した。ベルギー王立美術館でフリーゲルの絵を鑑賞し、オランダのテーマパーク・マドローダムのミニチュアの街を見学後アムステルダムで宿泊した。20日、オランダのデン・ハーグの駅からドイツ・ケルン行きの列車に乗り乗した。ケルン大聖堂を見学してコブレンツに移動、ライン川を航行するフェリーで小さな子ども連れのドイツ人親子と会話しながら、河畔沿いにローレライの岩、古城などを観ることができた。下船後フランクフルト経由でミュンヘンに移動した。21日早朝より、ブーフローからロマンチック街道の終点都市であるフュッセンに向かう。ノイシュヴァンシュタイン城を見学しミュンヘンに戻る。夕方、レストランで友人と食事をしながら、4日後にスペインのバルセロナで待ち合わせとして別れ、それぞれ都市を巡ることとした。ミュンヘン駅から夜行列車に乗り乗しオーストリアのインスブルックに到着した。22日、朝から街を観光し、午後には列車でスイス・チューリッヒに向かった。市内ではフェスが開催されていて、大道芸や多くの屋台で賑わい、現地の人と会話を楽しみ愉快的な時間を過ごすことができた。23日、

チューリッヒ中央駅からイタリア行きの列車に乗ってミラノに向かう。途中、アルプスの山々の景観に感動しつつ、トンネルを抜けると透き通った青空と森林の美しさにとても心が揺さぶられた。ミラノ中央駅は天井が高く美しい構造をしていた。昼食後乗車した列車は地中海沿いに進み、ジェノバ、サンレモを経由してフランスのカヌに到着した。さらに夜行列車を乗り継ぎ、24日朝、スペインのバルセロナに到着。ガウディの作品、サグラダ・ファミリアでは塔の中を最上部までらせん状の階段を登った。中は狭い空間で何か不思議な感覚だった。25日、サンタ・エウラリア大聖堂を見学し、ピカソ美術館で友人と再会した。再び2日後にパリで待ち合わせとし、フランスのリヨン行きの夜行列車に乗り、26日早朝、リヨン発パリ行き的高速鉄道TGVに乗った。パリでは、コンコルド広場、シャンゼリゼ通り、凱旋門などを巡った。27日、エッフェル塔で友人と合流し、オペラ座からモンマルトルへと向かう。風車やサクレ・クール寺院をみて画家の気分を味わう。ポルドーに向かう友人と別れ、28日、ベルサイユ宮殿に向かう。ルイ14世時代の豪華な装飾品に圧倒され、庭園の美しい自然の香りとともに心が研ぎ澄まされた。パリ市内に戻り、ポンピドゥー・センターで現代アート、パフォーマンスを楽しむ。観光客が多くとても活気があった。深夜に友人と合流、29日、ルーヴル美術館では、コロネ、ミレー、ルソーの絵に時間を費やした。夕方、ノートルダム大聖堂を訪れ、モンマルトルで「子どもが描かれた絵」を探すが見つからなかった。30日、シャルル・ド・ゴール空港からアエロフロートでモスクワのシェレメチェボ空港をトランジットし、無事成田に到着。15日間の旅は終了した。

この自由旅は、疾風のごとく多くの国を訪れ、外国の自然、異文化の建造物、美術品を心に焼き付けたこと、また移動の途中、列車や観光地で多くの外国の方々ともふれあい、助けられ、貴重な時間を過ごすことができた。これらの経験により価値観が大きく変わり、『世界の広さ』を感じた2週間の旅であった。

近年、世界各地の政情が不安定で争いごとが頻発し、多くの人々が不安を抱えている。しかし、時は巡り、皆が少しずつ努力することで、そよ風に優しさを感じられる生活に戻り、自分とは異なる価値観を持つ人を認め合い、お互いを尊重し、人々とのつながりが感じられる時代が来ることを期待したい。